

朝日将軍

史実と小説の間

長島喜平

木曾義仲



朝日将軍

木曾義仲

史実と小説の間

長島喜平

国書刊行会



著者略歴

長島喜平(ながしま きへい)

略歴・埼玉県嵐山町鎌形に生まれる。(1920)

- ・元埼玉師範(埼玉大学)卒。東京大学文学部研修生。
日本大学卒。
- ・県下各小・中・高校の教諭、埼玉県立日高高校初
代校長、同坂戸高校長を最後に定年退職。

著書・本山修験大行院文書集。

- ・東上線各駅停車。
- ・関東万葉歌碑(近刊)。

現在・埼玉県郷土文化会(埼玉史談)会長。

- ・埼玉県文化振興基金幹事。
- ・嵐山町文化財保護委員長。

賞・埼玉県教育功労賞。

- ・埼玉県文化功労賞(知事賞)。

叙勲・勲四等瑞宝章(平成2年11月3日)。

住所・〒355-02 埼玉県比企郡嵐山町鎌形1875

朝日将軍 木曾義仲

平成2年12月5日 印刷

平成2年12月10日 発行

著作権者との
申合せにより
検印省略

著者 長島喜平

発行者 割田剛雄

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 03(3917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 印刷・セイユウ写真印刷(株) 製本・田中製本(株)

朝日將軍 木曾義仲 目次

一、	駒王丸の誕生	3
二、	大蔵の戦い	8
三、	駒王丸木曾へ	20
四、	旗挙げと市原の戦い	27
五、	上野国へ入る	40
六、	中原兼遠の起請文	44
七、	横田河原の戦い	49
八、	頼朝と義仲の不和	61
九、	平家の源氏追討と燧城の戦い（北国下向）	76
十、	木曾願書と覚明	87
十一、	俱利伽羅峠の戦い	98
十二、	安宅・篠原の戦い	110

十三、	木曾山門牒状とその返牒……………	117
十四、	平家の都落ち……………	131
十五、	義仲京へ入る・法皇山門より戻る……………	136
	——義仲朝日將軍となる——	
十六、	鎌倉遣使中原泰定と猫間中納言のこと……………	150
十七、	妹尾兼康の裏切りと水島の戦いの敗北……………	156
十八、	所謂『十月宣旨』のこと……………	166
十九、	鼓判官のことと法住寺殿攻め……………	169
二十、	木曾義仲の最後……………	180

補

一、	木曾義仲に関する旧跡と伝承地……………	190
一、	木曾義仲関係年表……………	207
一、	「木曾義仲公顕彰碑」……………	
一、	参考資料……………	

一、駒王丸の誕生

朝日將軍木曾義仲の幼名を駒王丸と言った。

駒王丸が生まれたのは、久寿元年（一一五四）である。漸次、武家の時代へと政權が、移り始める頃であつた。

駒王丸の出生地

駒王丸が、生まれた処は、上野国（群馬県）多胡と考えるむきもあるが、次にのべる大蔵の戦などから、武蔵国（埼玉県）比企郡ひきごおりかまたごう鎌形郷と考えられる。

そこには、義仲の妻山吹姫の創建したと伝えらる班溪寺があり、近くには、木曾殿館と称する処もある。



伝木曾殿館跡



班溪寺

（山吹姫については、いろいろ諸説があつて、各地に伝承が残る。また、木曾殿館は、木曾殿屋敷とも鎌形館ともいい、旧跡として一応「伝木曾殿館跡」と表示をした。伝承地として、義仲に関係があると考えられる。なお、「木曾殿」という以上、義仲が木曾に住むようになってからか、更にそれ以後、義仲が名声を博し、源氏が天下を取ってからか、更に中世か、ずっとさがって江戸時代であつたかも知れない。それは、いずれにしても、伝承であつたとしても、この土地の人々は、風雲児義仲を慕い、郷土の誇りとしていたのである。）

館跡の所在

（いずれの土地の人でも、その郷土から出た偉人・英雄を思慕し、誇りとし、更に崇拜する心情は同じであろう。たとえ、伝承であろうと、敢えて否定せず、大切に育てて見守らなければならない。）

（班溪寺と木曽殿館跡は地続きで、嵐山町鎌形にあり、東京池袋より、東武東上線にて武蔵嵐山駅まで約一時間十分、そこから約三・七キロ、閑静にして風光明媚な処で、史跡・旧跡にとんでいる処である。近々「木曽義仲公生誕の地」の碑が建立される。）

上野国説

義仲の出生地について、上野国多胡説が出た論拠は、『吾妻鏡』の治承四年十月十三日に、「木曽冠者義仲、亡父義賢主の芳躰（はろふみ）（前人が行ったよい行跡）を尋ね、信濃国を出でて上野国に入る云々」とあり、上野国多胡は、義仲の父義賢の館のあった処で、木曽で旗挙げをした義仲が、上野国へは、兵を募りに行ったが、武蔵国まで行かなかったことを指摘し、義仲は、武蔵国とは、あまり縁がなかっただろうと、考えたからだろう。義仲は、父の芳躰の地、多胡を尋ね、土豪や住民を説得し、自分の麾下にいれることは、他の土地よりもたやすいと考えられる。更に、武蔵国を考えていないわけでは、なかっただろうが、諸般の情勢が、武蔵まで入ることを赦さなかったのだろう。（その頃の諸般の情勢とは、上野国・下野国には、現在の足利市を中心とする地方に、藤姓足利氏

と源姓足利氏が対立してをり、更に新田氏や他の豪族が入り乱れていたもので、義仲は、あまり関東北部には、深入り出来なかった。更に頼朝が、既に鎌倉に入っていたので、関東南部はもちろんのこと武蔵にも入れなかったと考えられる。だが、一方、頼朝にしてみれば、義仲が上野国へ入ったことは、足利氏をはじめ、他の武士を牽制することになったので、鎌倉の基盤固めには、一時的ではあれ、好都合であっただろう。しかし、義仲が更に進んで武蔵国へ入ったとしたら、頼朝と対立することは必定であっただろう。義仲にしてみれば、これ以上、深入りは不利と見定めて、信濃へと引きあげてしまったと考えられる。(へ五、上野国へ入るを参照のこと。)

義仲木曾へ
義仲の出自は、当時、貴種とされていた源氏である。生まれて二才の頃、木曾に送られ、そこで育ったので木曾義仲と一般に称する。

父義賢

父は、帯刀先生源義賢といい、京にあって近衛天皇の東宮(皇太子)の時、護衛の長官をつとめたか、やがて、東国にくんだり、武蔵の国の大蔵の館で、甥の悪源太義平に討たれた。帯刀先生(たてわきせんじょう)は、たちはきとも読む。

帯刀とは、東宮の護衛の武士で、先生とはその役の長である。

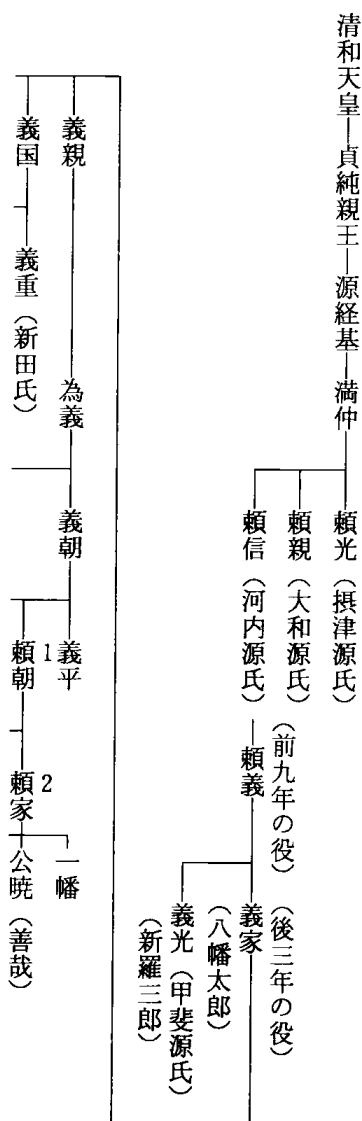
(近衛天皇は^{なりひと}睦仁親王という、保延五年(一一三九)五月に生れ、わずか三ヶ月後の

八月十七日に立太子、永治元年（一一四一）十二月七日、三才にて皇位についたので、源義賢の帶刀先生の役は、二年半ばかりであった。皇位継承の問題は、こゝではふれな
いでおく。）

母小枝御前

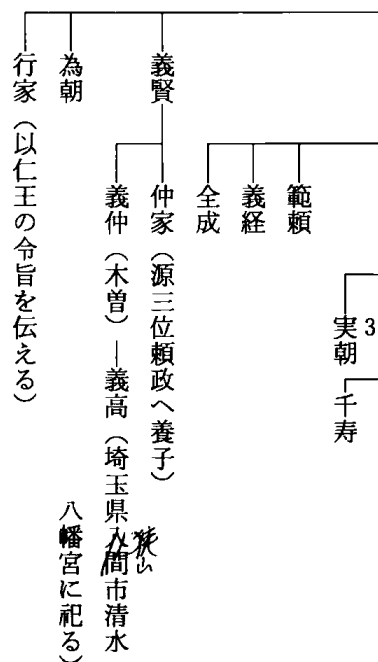
また、母は、上野国の多胡氏の娘ともいい、さらに『尊卑分脈』では、遊女と記され、その名は、小枝御前と称したという。（遊女とは、今の感覚では、卑下したむきもあるが、当時としては、当たり前のように考えられていたようである。）

〔源氏系図〕



「義忠」 「義康（足利氏）」

「3 実朝」 「千寿」



二、大蔵の戦い

多胡庄

帶刀先生義賢は、東宮（皇太子）が、天皇（近衛）になられると、やがて上野国多胡の庄に移って館を構えた。（多胡は、現在の群馬県多胡郡吉井町で高崎市の南方に当たり、早くから開け、『万葉集』にもこの地方は歌われ、なお「多胡碑」も残っているとこ
ろである。）

この吉井町の多胡には、源義賢の館跡と称する処が残り、土塁や空濠が、今も残るが、民家の宅地となってしまうている。

義賢が、京都から何時頃東国に下ったか、また、どのような理由で多胡に居館を構えたか、どの程度ここに住んでいたか、これらについては、はっきりしない。

居館を構えた頃、その地方の状況は、現在の足利市を中心に、下野国に於ける藤姓足利氏と源姓足利氏とが張り合い、更に上野国の新田氏との三つ巴で、互いに牽制し合っていた。(藤姓とは藤原氏の系統で、藤原秀郷の子孫であり、源姓とは清和源氏の子孫で、八幡太郎義家の三子義国は、上野・下野の二国に勢力を張っていた。その子が、足利氏・新田氏となるのである。)

大蔵館跡



その頃、義賢は同族の新田氏を頼って、上野国へ入って来たとも考えられる。

ところが、この新田氏は、同族の足利氏と境界問題や勢力争いで、藤姓足利氏と手を結び、同族の源姓足利氏を中に挟み、何時も小競り合いが絶えなかった。

一方、武蔵国の秩父に勢力をもっていた秩父氏が、秩父盆地の牧を中心とする農牧から、広大な農地をめざして、武蔵国や上野国の南部に進展しはじめ、新田氏・藤姓足利氏に挟まれた源姓足利氏と通ずるようになったとも考えられる。

こうして、所謂、遠交近攻政策的なことが、どのように義賢に影響したかわからないが、新田氏は割合に弱い、所謂弱小国であったことが、義賢をして秩父氏と結ぶようになり、多胡に居館を構えたのかも知れない。

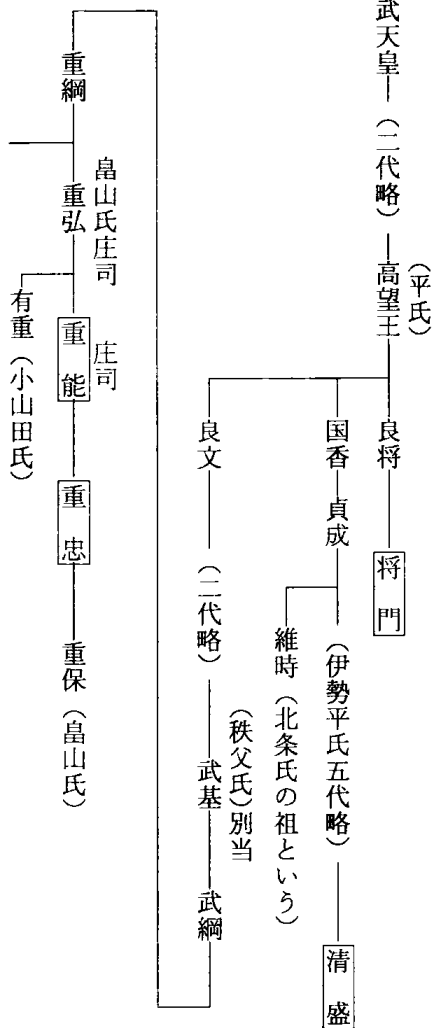
それならなぜ、多胡の地にどのような理由で居館を構えたかということになると、多胡は歴史的にも古い地で、朝廷や藤原氏と関係があった地であろうし、また、義賢の父為義は、大納言藤原頼長に仕え、当の本人である義賢は、皇太子の帯刀の長でもあったので、そうした関係からこの地を受けたのかも知れない。

更に、また、この地の東に、足利氏・新田氏が、源義国の支配地を受けたように、同族の源氏である義賢の父為義が受け、更に義賢が受けた地であるとも考えられる。

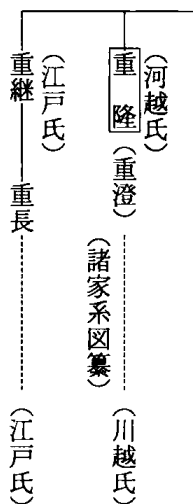
いずれにしても、多胡に居館を構え、やがて秩父氏（河越重隆）と相通ずる所があったのは、こうした北関東の勢力争いに所以する所があつたのであろう。ゆえん

やがて、義賢が武蔵国の中央部、大蔵の地にも館を構え、鎌倉の源義朝と秩父氏（河越重隆）にて武蔵国の争奪戦へと発展するのである。

桓武天皇——(二代略)——高望王(平氏)



秩父氏



さて、この桓武平氏の流れをくみ、秩父地方に勢力を張っていた秩父氏が、さきによべたように、秩父盆地から進出して、河越・江戸・畠山（川本町）へと、農耕地帯の支配を拡大するために進展しつつあった。

同じ頃、源氏の棟梁である源義朝は、鎌倉を基盤として、相模国は大凡従えていたが、武蔵国や北関東には、なかなかその力が及ばなかった。

そこで、義朝はこの地方を一手に従えて号令しようとしたが、これを阻みはじめたのが秩父氏であった。

その秩父氏のうち、河越氏がもっとも権勢をふるい、国司が遥任のため、武蔵国留守所惣検校職として、武蔵守にかわって、実権を握っていた。（秩父氏嫡流の畠山重能が検校職であるのが当然であるが、この時は、どうも河越重隆であったようである。そのため、同じ秩父氏でありながら、畠山重能と河越重隆は、不和であった。重能がこうして源

義平に従って、源義賢・河越重隆を討ったが、この理由については、次の「駒王丸木曾へ」の処を参照されたい。」

ところが、東国は、源八幡太郎義家の時代、源氏の恩顧を蒙る武士が多かったため（前九年・後三年の役にて）、武蔵国を統括するのには、貴種である源氏をいただき、名分をはっきりしなければならぬと、河越重隆は考え、源義賢を利用しようとしたのである。そこで、源義賢を多胡から大蔵の館に迎え入れ、自分の娘を与え、娘婿として住ませ、その威光の力を借りて、武蔵国の支配を安定させようと、はかったのであろう。

これでは、相模国鎌倉に居た源義朝にとっては、なんとしても、東国支配のためには、秩父氏特に河越氏が邪魔者であった。

しかし、大蔵へ進出して来た義賢は、義朝との関係については、同じ、源氏であり、異母ではあるが弟である。

当時、地方の武士の多くは、京都にのぼって皇室や皇室に直属する公家（摂関藤原氏など）に仕え、番役などに奉仕して、自分の地位や支配権を安んずられていた。（番役とは、京にのぼり、自分が隷属する皇室や公家の護衛に当たったり、雑役をした。）

そんな時、兄義朝と弟の義賢の異母兄弟の間柄は、どうであったろうか。（それは、単

に源氏だけではないが、身内で骨肉相はむ争いが繰り返されている。このことは、歴史をひもとけば明らかで、支配権を得るためには、兄弟骨肉が、敵となり、遺恨が直接的であった。）

だが、源氏を発展させるためには、義賢が多胡へ入った時点で、兄義朝と弟の義賢が相協力すれば、源氏が東国を固めるのには、絶好の機会で、南北相まって武蔵・相模を支配することが、出来たことであつたろう。

だが、兄弟対立して、しかも、義賢が秩父氏（河越重隆）と組んだため、兄義朝としては、なんとしても、この弟義賢を排し討たなければならなかったのである。

河越重隆は、義賢を武蔵の中枢の地、後に鎌倉街道として、発展する大蔵宿（現埼玉県比企郡嵐山町大蔵）のちかくの大蔵館に、いわば、武蔵国の中央に、仁平三年（一一五三）義賢を住まわせ、自分の娘を与えたわけである。（この大蔵館には野与党の大蔵氏が居たというが、この大蔵氏を他に移したとも、追いやったともいう。さらに大蔵氏の娘を義賢の妾としたともいうが、伝承の域を出ないだろう。）

秩父氏にしてみれば、武蔵国を三点（江戸・河越・畠山）で抑え、中央に源義賢を祭り上げておけば、相模国鎌倉の義朝を、牽制することが出来ると思つたが、却つてそれ